

要旨 名詞は普通特定の述語の特定の項として潜伏疑問名詞句になり得る一方で、他の環境では他の意味機能を果たせると考えられている。また、潜伏疑問名詞句には疑問詞指定疑問が潜伏していると想定されてきた。しかし、「合否」「是非」「真偽」などの名詞—「潜伏極性疑問名詞」と命名—にはこれらの想定が当てはまらず、名詞句主要部として用いられた場合（「潜伏極性疑問名詞句」）、常に極性疑問を潜伏させる。潜伏疑問名詞句は変項名詞句、つまり疑問詞指定疑問文構造の命題関数を表すものと分析されてきた。しかし、潜伏極性疑問名詞句はたとえ命題関数を表すとしてもそのような意味構造になりえないため、変項名詞句ではない。また、潜伏極性疑問名詞句は文中での意味機能に著しい制限がある。指示的名詞句、叙述名詞句として使えないだけでなく、変項名詞句が現れるとされる環境の中でも、（倒置）指定文や絶対存在文、潜伏命題文においては用いられない。また、いくつかの点で潜伏極性疑問名詞に類似する名詞群 3 つの存在も報告する。

1. はじめに：潜伏疑問名詞句

名詞句の中には、素朴に考えてもその意味が指示対象だとは言い難い名詞句が多数ある。以下の例の下線部もそのような名詞句で、潜伏疑問名詞句と呼ばれる。

(1) a. ソクラテスはアキレスの弱点を知らない b. アリストテレスはプラトンの師匠を忘れた。
なぜなら、下線部の表しているものは、実際にその記述が当てはまる対象（a ならアキレス腱）ではなく、むしろ下線部の記述を満たすものが問われている間接疑問節と同じものであると考えられるからである。¹ このことは、以下のように潜伏疑問名詞句をそのような間接疑問節、ないしその正しい答えに入れ替えてみると、前者の場合にだけ元の文とほぼ同じ意味になることから確認できる。

(2) a. ソクラテスは{≒何がアキレスの弱点か／≠アキレス腱}を知らない。

b. アリストテレスは{≒誰がプラトンの師匠か／≠ソクラテス}を忘れた。

本稿では、潜伏疑問名詞句を名詞句の文中の意味機能（西山 2007 など）の 1 つとして捉え、(1) の例に見られるような特定の述語の特定の項となる名詞句の特性であると考え。原則としてどのような名詞もそのような項として現れれば潜伏疑問名詞句になり得る一方で、他の場合には他の意味機能を果たせると考えられている。ただし、「御社」「某氏」「弊社」などの指示的にしか使えない特殊な名詞や、Baker (1968 : 90) で潜伏疑問名詞句になれないことが指摘されている固有名詞、代名詞等はその例外である（西山 2013: 380–381 も参照）。

潜伏疑問名詞句に関してもう一点重要なことは、潜伏する疑問として疑問詞疑問だけが想定され

* 本研究は JSPS 科学研究費（課題番号：17K17842）の助成を受けたものである。本文で言及したコメントをくださった諸氏に深く感謝する。

¹ 潜伏疑問名詞句が厳密に何を表すかには諸説あり、形式意味論で盛んに議論されている。ここではその詳細には立ち入らず、潜伏疑問の古典的研究である Baker (1968) に従い、インフォーマルに間接疑問節と同じ意味を表すと考えておく。

てきたことである。このことは先行研究において潜伏しているとされる疑問の例が疑問詞疑問であり、選択疑問や極性疑問の例が皆無であることから明白である。

2. 潜伏極性疑問名詞

潜伏疑問名詞句について述べた上の2点が当てはまらない名詞が日本語には多数存在する。

- (3) 花子は太郎の合否[≡太郎が合格したか否か]が気になった。
- (4) 改革案への賛否[≡賛成か否か]がはっきりしない応答が本部から返って来た。
- (5) 国民に消費税増税の是非[≡是か非か]を問う。
- (6) 授業を始める前に履修者全員の出欠[≡履修者全員について出席か欠席か]を確認した。
- (7) 候補者の当落[≡候補者が当選するか落選するか]を予想する。
- (8) アプリケーションのアップデートの有無[≡アップデートがあるかないか]をチェックする。
- (9) 試合の勝敗[≡勝つか負けるか]を決めるのはチームの人気ではない。
- (10) その噂の真偽[≡その噂が真か偽か]は不明だ。

これらも潜伏疑問名詞句だが、潜伏しているのは疑問詞疑問ではない。「太郎は合格か否か」や「本部は改革案に賛成か否か」のような一方がもう一方の否定という意味関係になっている極性疑問であると考えられる。² 「特定する」のように間接疑問詞疑問節を項に取り、一方で間接極性疑問節を項に取らない動詞で、これらの名詞句を項に取りにくいものがあることは、疑問詞疑問が潜伏していないことの根拠になる。

- (11) a. ?太郎の合否を特定した。 b. ?太郎が合格か否かを特定した。
c. Cf. 誰が犯人かを特定した。

逆に、これらの名詞句は、間接極性疑問節を項に取り、間接疑問詞疑問節を項に取りにくい「判別する」のような動詞の項になることができる。

- (12) a. 機械で傷の有無を判別する。 b. 機械で傷が有るかどうかを判別する。
c. Cf. ?コンピュータで誰が嘘つきかを判別する。

日本語では極性疑問文を埋め込むと「～かどうか」や「～するかしないか」のような選択疑問文の形になる。間接疑問節でさえこのように両者の区別が微妙であるところで、潜伏しているとなると、どちらなのかを判断するのはさらに困難であるが、本稿では選択疑問ではなく極性疑問が潜伏しているとみなすことにする。いずれにせよ、潜伏しているのが疑問詞疑問ではないことに新規性がある。

これらの名詞は、主要部としては基本的に潜伏疑問名詞句以外の使いみちがない。これらの名詞は潜伏疑問名詞句として用いられることが語彙的に定まっているのである。このような興味深い性質を持っている名詞—「潜伏極性疑問名詞」と呼ぶことにする—の存在は管見の及ぶ限りどの言語でも報告されていない。

3. 潜伏極性疑問名詞の文中における意味機能の制限

² 「合格不合格」「有り無し」「勝ち負け」などの複合語も同様の名詞と考えられる。アクセントが1つにまとまらないものもあるが、主要部が1つに定まらないからであり、統語的には1語とみなして問題なからう。

以下では、この類の名詞が主要部となっている名詞句が西山（2007）などで挙げられている名詞句の文中における意味機能のうちどれを果たし得るかを検討する。

3.1. 指示的名詞句

第一に、潜伏極性疑問名詞は指示的名詞句（世界の中の対象を指示しようとする名詞句）として用いることが極めて難しい。³ 「あの+[名詞]」は指示的名詞句としてしか機能しないことが知られている（p. 7）。潜伏極性疑問名詞に「あの」を付けると、(13)のようにそれだけで奇妙に響く。

(13) a. *あの合否 b. *あの是非 c. *あの有無

3.2. 叙述名詞句

潜伏極性疑問名詞は叙述名詞句（p. 6. 指示的名詞句の指示対象に帰される属性を表す名詞句）、例えば、措定文の述語名詞句やトシテ句にならない。

(14) a. *これは合否だ。（措定文） b. *あれは有無だ。（措定文）

(15) Cf. a. これは猫だ。 b. あの人は言語学者だ。

(16) a. *合否として b. *出欠として

(17) Cf. タマが魚を食べないのは猫としておかしい。

3.3. 変項名詞句の代わり

変項名詞句とは、「命題関数を表す名詞句であり、変項の値を充足することによって指定文の基本的意味構造を形成するもの」（p.10）である。たとえば、次例 a の主語名詞句は、b のような命題関数を表し、文全体はその変項 x を「この男」の指示対象で埋めるという意味構造をしているとされている（p. 11）。

(18) a. 犯人はこの男だ。（倒置指定文） b. [x が犯人である]

実は、潜伏極性疑問名詞句は変項名詞句の定義にあてはまらない（4 節）。そのため、以下で検討する用法を「変項名詞句の代わり」と称することにする。以下、変項名詞句の諸用法と同様の用法で潜伏極性疑問名詞句が用いることができるかを観察する。

まず、潜伏極性疑問名詞句は、（倒置）指定文の変項名詞句の代わりにならない。

(19) a. *太郎のパーティーの出欠は欠だ。（倒置指定文）

b. *{否/不合格}が太郎の試験の合否だ。（指定文）

潜伏極性疑問名詞は絶対存在文の変項名詞句（例えば、(21)a の下線部）の代わりにもならない。⁴

(20) a. *太郎のパーティーの出欠がない。 b. *改革案への会長の賛否があった。

(21) Cf. a. この問題を解けるひとがいる。

b. [x がこの問題を解けるひとである] を満たす x の値は空でない。（p. 17）

さらに、潜伏極性疑問名詞は、**潜伏命題文**（西山 2013）にも使えない。(22)は潜伏極性疑問文の

³ 次の場合は指示的名詞句と言えるかもしれない。

(i) 掲示板に受験生の合否が並んでいる。（田中太一、p.c.）

ただし、これも「受験生が合格したかどうか」のような間接極性疑問節に置き換えられる。また、可能なのは複数の合否や当落をリストしている場合に限られるようである。

⁴ メトニミーの解釈（〈出欠の知らせ〉など）のために容認度が高い話者も少なくないようである。しかし、メトニミーの解釈になるということは、ここで議論している絶対存在文の変項名詞句そのままの意味では解釈できないということを示唆する。

読みだけが可能で、太郎の合否が現にそうである結果であることが気になる、というような潜伏命題文の読みは不可能である。

(22) 太郎の合否[≡合格したかどうか]が気になる。(西山佑司、p.c.)

このことは、(23)a が潜伏疑問文の読み(b)も潜伏命題文の読み(c)も可能であることと対照的だ。

(23) Cf. a. わたくしは、花子の年齢が気になる。(西山 2013a: 390)

b. わたくしは、[花子の年齢がいくつであるか]が気になる。

c. わたくしは、[花子の年齢は、現にそうであるしかじかの年齢である]ということが気になる。

一方、潜伏極性疑問名詞句は入れ替わり読みの変化文の変項名詞句(例(25)aの下線部)の代わりにはなれる。

(24) a. 大学一般入試の際、高校のレベルで合否が変わる[…]

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q10156079080)

b. その他個別で履修生の出欠を変更する場合[…]

(http://wwwcis.kokushikan.ac.jp/doc/manaba_clicker_teacher.pdf)

(25) Cf. a. アメリカの大統領が(オバマからトランプに)変わった。

b. ≡誰がアメリカの大統領かが変わった。c. ≠アメリカの大統領(トランプ)が変貌した。

以上の観察をまとめると、潜伏極性疑問名詞句は、間接疑問節で置き換えられる変項名詞句の現れるような環境では用いることができるが、それ以外の環境には生起できないといえる。潜伏疑問名詞句とそれ以外の変項名詞句を同一視できないことが示唆される。

4. 潜伏極性疑問名詞句が提起する理論的問題

この節では、潜伏極性疑問名詞句の存在が提起する理論的問題を、西山(2013)所収の「変化文、潜伏疑問文、潜伏命題文」(pp. 369-406)の分析を取り上げて考察する。

西山(2013: 374)は、「文中の名詞句のなかには、形は名詞句でありながら意味的には疑問詞疑問(Wh-question)と等価な機能を果たすものがある。この種の名詞句を含む構文は「潜伏疑問文」(concealed question)と呼ばれる」と述べている。疑問詞疑問が潜伏していると想定している点では従来の研究と同様である。そして、潜伏疑問名詞句が間接疑問節と実質的に同じ意味を表す理由を問い、「要するに、潜伏疑問文は、当該名詞句が変項名詞句であり、主動詞が引き金になって、変項名詞句の変項の値を Wh 化している構文といえる」(p. 380)と説明している。ここで重要なのは、変項名詞句が表している命題関数も潜伏疑問名詞句に潜伏していると想定される疑問詞疑問も、単に変項を含むだけでなく、全体として指定文(specificational sentence)の構造をしていると想定されている点である。例えば(26)aの下線部に潜伏しているのは、bのような疑問詞指定疑問文であって、cのような疑問詞措定疑問文ではない。

(26) a. 太郎には花子の恋人がわからない。b. [≡誰が花子の恋人か]

c. [≠花子の恋人はどんな人か]

指定文が潜伏しているとされることは、以下の記述から明らかである。

変項名詞句は、名詞句でありながら、変項を含み、変項の値を充足することによって指定文の意味構造を形成する名詞句である。(p. 374)

潜伏疑問文のこれまでの研究において、当該の名詞句の意味が疑問詞疑問文の意味に対応することは指摘されてきたが、肝心の疑問詞疑問文が実は、「A は B だ」という倒置指定コピュラ文（あるいは、「B が A だ」という指定コピュラ文）の意味構造を有していること、そして値名詞句 B が疑問の対象になっている、ということについてはこれまでかならずしも十分認識されてこなかったといえる。(p. 381) ⁵

このように考えることの背後には、潜伏疑問名詞句を変項名詞句として分析するという理論的動機があったと考えられる。そして、変項名詞句が「明らかだ」のような潜伏疑問述語の特定の項となることで、命題関数の変項が疑問詞に置き換えられ、「指定疑問文の意味構造を有する潜伏疑問名詞句と解釈される」(p.379) とされている。そう考えることで、「潜伏疑問文の読みと指定コピュラ文の読みとは変項名詞句を介して意味的につながる」(p.199) という主張になるわけである。

しかし、この主張は潜伏極性疑問名詞句には一般化できない。次例を検討しよう。

(27) a. 太郎は、花子の合否[≡花子が合格したか否か]に関心がある。

a の下線部が

表す命題関数は b のような指定文構造のものとは考えにくい。c のように言えないからである。⁶ 命題関数として分析するのであれば、極性が変項になっている d のようなものと考えべきだろう。

b. [x が花子の合否である] c. *{合格/不合格}が花子の合否だ。

d. [±花子が合格した] (±は不定の極性)

これは指定の意味構造にならず、潜伏疑問名詞句～変項名詞句～指定コピュラ文という三位一体説の崩壊を意味する。従って、西山の「筆者の考えでは、一般に潜伏疑問文を構築する名詞句[⋯]は、実は、このような指定コピュラ疑問文の意味構造を有する名詞句にはかならない」や「潜伏疑問名詞句が有する疑問の意味は変項名詞句を基礎にして意味論的に構築された結果である」といった主張（今井・西山 2012: 199）は一般性を維持できない。⁷

5. 潜伏極性疑問名詞と共通点のある名詞

潜伏疑問という観点から日本語の名詞を観察すると、潜伏極性疑問名詞以外にも興味深い名詞が多数見つかる。

5.1. グループ 1：潜伏選択疑問名詞句になることがある名詞

対照的な意味の漢字 2 つからなる名詞ではあるものの、上述の意味機能の制限という点で、潜伏極性疑問名詞と同じとはいえない名詞が多数存在する：男女、異同、長短、得失、好悪、黒白、白

⁵ Frana (2017: 21) も潜伏疑問名詞句に潜伏しているのは措定ではなく指定の疑問だと論じている。

⁶ ただし、この議論は、メタ言語の(27)b の妥当性を判断するにあたって自然言語への翻訳の c の容認性を判断材料としている点に問題が無いわけではない。西山 (2013: 392) にも同様の論法がある。

⁷ 西山 (2013) は措定の疑問が潜伏している「非標準的潜伏疑問文」があると主張し、これが正しいなら、変項名詞句による潜伏疑問名詞句の分析は既に一般化できないが、筆者は非標準的潜伏疑問文を区別して扱う必要性を疑っている。この点で筆者が正しいとしてもなお、潜伏極性疑問名詞句があるため、全ての潜伏疑問名詞句が変項名詞句だとは言えない。

黒、多寡、多少、正邪、善悪、良し悪し、などである。これらは一つの類をなすかどうか不明だが、意味機能の点で潜伏極性疑問名詞と類似点のあることが以下の例からわかる。⁸

- (28) *その善悪は善だ。(倒置指定文の変項名詞句の代わりにならない)
- (29) *これは正邪だ。(叙述名詞句にならない)
- (30) 太郎は行いの善悪が気になる。(潜伏疑問文の解釈のみ可。潜伏命題文の解釈は不可。Cf. (22))

一方、以下の例では、これらの名詞が潜伏極性疑問名詞には果たせない機能を果たしている。

- (31) a. 正邪を併せ持つ。(指示的名詞句)
b. この異同そのものは、記事の趣旨を変える程のものではない[…](指示的名詞句、<https://books.google.co.jp/books?isbn=4840620202>)
- (32) 決して『ありがとう』に甲乙があるのではなく[…](絶対存在文の変項名詞句の代わり、<http://www.nst-kenkyukai.com/>)
- (33) このグレイロ編刊本は原文書と対比すると若干の異同がある[…](所有文(西山 2013)の変項名詞句の代わり <https://books.google.co.jp/books?isbn=4840620202>)

疑問が潜伏している場合、それが極性疑問なのか選択疑問なのかはこれらに関しても難しい問題である。このグループにおいては、否定の命題が肯定の命題の存在を前提とするというような非対称性があまり感じられないので、選択疑問が潜伏していると考えておく。

5.2. グループ2：潜伏選択疑問名詞「大盛り普通盛り」「優良可不可」など(田中太一 p.c.)

下線部も潜伏疑問名詞句であろう。

- (34) (大盛りでも追加料金の無い飲食店) ご飯の大盛り普通盛りはどうしますか？(氏家啓吾、p.c.)
- (35) 学生は、成績表をもらって初めて優良可不可がわかるのだ。(田中太一、p.c.)
- (36) 文字サイズの大中小を選択する。(同上)
- (37) 禁煙・喫煙のご希望はお約束！(<https://www.ikyuu.com/00002207/10501014/10058473/>)

これらは選択疑問を潜伏させていると考えられる。語形成の観点からは、同位複合語と言え、列挙された選択肢全体が複合語になっているという特徴がある。また、このパターンには生産性がある。このような名詞が潜伏疑問名詞句以外の意味機能で用いることができるかどうかは、今後の観察を待ちたいが、少なくとも次の例では間接疑問節には置き換えられず、指示的名詞句であると言って良いだろう。(ただし、上の例では選択肢が選言で結ばれる関係にある一方、下の例では連言で結ばれる関係にあるという違いがある。)

- (38) ちなみにこのシリーズの大中小を全部持ってます[…]
(<https://smashop.jp/dp/4977292211468>)

5.3. グループ3：値の無い単位「パーセント」など(氏家啓吾 p.c.)

「10 パーセント」のような、[値+単位]という形の数量表現の単位が独立して、値を問う潜伏疑問を表す名詞句として用いられることがある。この語形成のパターンもいくらか生産性がある。

⁸ 変化文にも使えるが、「徐々に」等と共に起るため入れ替わり読みではなく変貌読みだと考えられる。

- (39) パーセント[≒何%か]はあまり変わっていませんが、秋田、望月が追いついてきています！
差は10%もないのでたったの4票くらいで抜くことも可能に！（氏家啓吾 p.c.、
<https://twitter.com/sangokuidol/status/1078476703255515136?s=12>)
- 基数詞に付く助数詞にはこのような使い方はなく、代わりに「助数詞＋“数”」が用いられる。
- (40) a. *冊[≒何冊か]を教えてください。b. 冊数を教えてください。（同上）
「号車」のように、潜伏疑問名詞句としても、指示的名詞句としても用いられるものもある。
- (41) この車両の号車が知りたい。（同上）
- (42) 特に内装が可愛いのは1・2号車で、他の号車はデッキ以外ほぼ通常の内装です。（同上、
<https://twitter.com/tetsudoshimbun/status/1090906954950529027>)

6. おわりに：今後の研究課題

潜伏極性疑問名詞、及びそれと共通点がある上記の名詞群が提起する問題を挙げて終わりとする。第一に、そもそも本稿で挙げた様々な類の潜伏疑問名詞句の意味をどのようなものと考えたべきかが問題である。潜伏疑問名詞句の意味については、形式意味論で議論が続いているが、本稿で報告した新たな類の潜伏疑問名詞句はその議論に一石を投じるだろう。

さらに、語彙意味論のレベルでは、上記名詞群のグループ分けも問題である。可能な意味機能、潜伏している疑問の種類、語形成など、複数の次元で分類する必要があるだろう。そして、これらの潜伏疑問名詞句になりやすい名詞が語彙的には何を意味するのかも問題になる。

これらの名詞は対照研究の観点からも興味深い。英語・フランス語には潜伏極性疑問名詞がないようである。したがって、このような名詞は通言語的に普遍的ではない。日本語以外で潜伏疑問名詞が見つかったのは、管見の及ぶ限りでは韓国語だけである。韓国語にも、**시비** (是非)、**당락** (当落)、**승패** (勝敗)、**여부** (與否) などの日本語か中国語に由来する潜伏極性疑問名詞があるようだ (幸松英恵 p.c.、秦秀美 p.c.)。なお、バスク語には、潜伏極性疑問名詞はない一方で、グループ1の名詞はあるとのことである (石塚政行 p.c.)。このことは、両者を別グループに分ける一つの根拠となる。

最後に、なぜ日本語や韓国語には潜伏極性疑問名詞があり、英語やフランス語にはないのかが疑問として残る。以下は憶測にすぎないが、歴史的な説明を与えられる可能性がある。潜伏極性疑問名詞の多くは借用語であり、借用元の言語では語ではなく句や節であった可能性がある。日本語・韓国語が元の言語の品詞・範疇に関わらず名詞として借用した結果、借用元の言語では述語を含む句で表されていた極性疑問の意味の語を持つに至ったという可能性がある。歴史的研究による仮説の検証が待たれる。

参考文献

- Baker, C. L. (1968) *Indirect questions in English*. Doctoral dissertation, University of Illinois.
- Frana, I. (2017) *Concealed questions*. Oxford: Oxford University Press.
- 今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう』岩波書店。
- 西山佑司 (2007) 「名詞句の意味機能について」『日本語文法』7(2): 3-19.
- 西山佑司編著 (2013) 『名詞句の世界』ひつじ書房。